

三岸節子〈短歌ポスト〉 入選作品 (令和元年前期分)

選者 小塩卓哉 (中部日本歌人会顧問)

【優秀作】

\*雲と海の対話\*

一瞬の静寂ありて予感する空と海の荘厳なる対話

愛知県一宮市 大島 千恵子

〈評〉空と海とが対話をするという絵のテーマは三岸が発想し、絵画として残している訳であるが、その絵を鑑賞しようとするこの歌の作者は、「一瞬の静寂」を感じ取っている。大自然を前にした画家の大いなる想像を、絵画の前に立ち同時に「予感」しようとする姿勢は、絵画に対する厳粛なリスペクトのゆえであろう。

\*さいたさいたさくらがさいた\*

せまりくる花の狂気に負けまいぞ両の指の数ほど生きて

愛知県稲沢市 大熊 信吾

〈評〉「両の指の数」というから百歳に近いのだろうか。九十を過ぎて三岸が残した大作の前で、作者は、その「花の狂気」に負けまいと思っている。芸術作品だからこそ、高齢になろうとも狂気の如きエネルギーが湧いてくることに、作者は同感し、たとえ自らは筆をとることがなくとも、深く絵画の主題に共鳴しているのである。

\*自画像\*

自画像の節子の瞳は底深く我を見つめし泣きたいほどに

愛知県稲沢市 安田 一子

〈評〉四句切れの歌。「見つめし」が連体終止形となっている。目は心の様子を訴えかける。若き日の節子のどこか泣きたいような視線は何に由来するのか。作者はそれが気になってならないのだろう。「底深く」と「泣きたいほどに」が一首の中で響き合い、青春期のもつ暗い淵のようなものを、見るものに呼び覚ますのだ。

【佳作】

\*三岸節子\*

あこがれの三岸節子に会いたくて老いたる父の車椅子押す

愛知県清須市 井深 靖久

\*その他\*

友と来て三岸節子の絵を見れば初夏の一日豊かに過ぎる

愛知県名古屋市長 佐野 正

\*その他\*

これがこの節子描きたるミモザかと心は弾み春愁の消ゆ

兵庫県川西市 飛鳥 もも

\*さいたさいたさくらがさいた\*

乱舞する桜の花に魅せられて吾も樹の下時空を超えて

愛知県一宮市 渡辺 なごみ

\*もや\*

赤々と赤い心がゆらめいて黒も負けずに燃えあがるもや

一宮市 竹田 さと子

\*盾を持った武士\*

楽しいの悲しいの誰のためなの兵隊さんお仲間はどこ

一宮市立今伊勢中学校 森 千紘